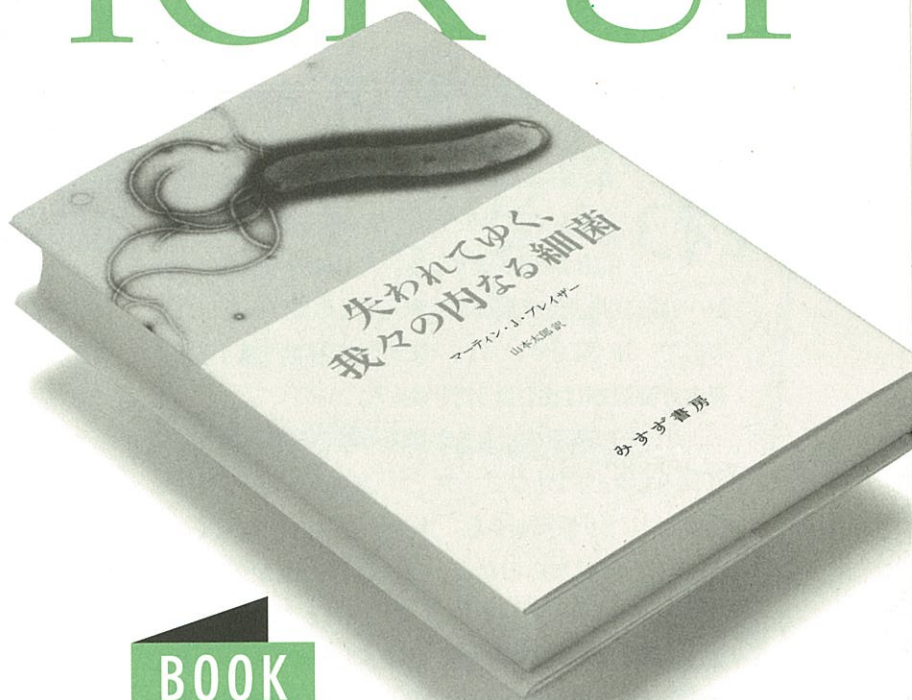


PICK UP

マーティン・J・ブレイザー 著 山本太郎 訳
『失われてゆく、我々の内なる細菌』
みすず書房 本体3200円



私

の家の前には造園屋が管理する土地があって、深く、雑草が繁茂している。

その中にはイネ科の草に擬態したオンブバッタやシヨウリョウバッタ、密やかに暮らすジグモや数種の多足類などがいて、小動物好きな私には楽しい。しかし造園屋は年に1度、ポリタンクに入れた農薬をトラックに満載して現れ、噴霧器でまき散らす。2、3日もすると繁茂していた雑草たちは初夏の日差しに晒され、驚きのスピードで枯れ葉色になり、小さな虫たちの姿も消えてしまう。

BOOK

人が扱うには、あまりに複雑で、失われやすくて

諏訪敦 選+文

人間に管理されたスペースにも、自然はしたたかに滑り込むが、何度か使われる農薬が、土や動植物たちにどういった作用をしているのか、私には想像もつかない。ただ直感的に、言い知れない違和感がその土地にはある。外来植物がやけに元気で揃いも揃って異様に成長が早い。そこでは意外性のある植物には決して出会わない。

本書によると、人間は多様な微生物の宿主であり、進化を共にしてきた。人体は約30兆個もの細胞で出来ているが、体内に常在する細菌や真菌は100兆個にも及び、その遺伝子総数は200〜800万個で、宿主のその数百倍にもなる。本書の主旨は、我々の体内にある多様な膨大な常在細菌と遺伝子群、そして常在細菌と人間の相互作用を包括する体系「マイクロバイオーム」に、抗生物質の乱用等が大きな変化をもたらしているという現状への、実証的な警告だ。ペニシリンに始まる抗生物質の歴史は、長きに渡り致命的な感染症に悩まされてきた人類には福音であったし、その有用性に議論の余地は無い。ただ、それは病原体だけを狙い撃ちするものではなく、作用範囲の細菌を無差別に叩く。共生関係にあるマイクロバイオーームに、絨毯爆撃するような行為を頻繁に繰り返して大丈夫なのだろうか。

卑近な例を言えば、風邪の症状で訪れた街のクリニックで、「熱が出ているなら、とりあえず抗生剤」と処方された経験はないだろうか。抗生物質はあくまでも細菌を殺すものだ。仮にインフルエンザだった場合、病原体はウィルスだから抗生剤は無効だが、「用心のために」と、簡単に処方されたことは。事実、アメリカ人は40歳になるまでに、平均30クールの抗生剤を処方される計算になるそう。やがて人間の体内にも細菌は戻ってくるだろう。だが、その菌の出身、構成比率は変わらないのだろうか。常在細菌の構成は幼年期にはほぼ決まり、人の間で受け継がれるそうだが、我々にもまだ完全には知られていないままで、健康に寄与し続けて来た重要な細菌体系を未来に渡す機会を、そしてそのバランスを安易な投薬のために永久に失う可能性もある。

著者は、30年以上も人体と細菌の関係を研究してきた。もちろん、抗生剤の恩恵も多々目撃して来た事だろう。だが、彼は奇妙な印象を訴える。「私たちは現在、かつてより病気になるやすくなっているような気がする」と。その直感の正体……人為が自然を操作する時に、支払わなければならない対価について、本書は詳らかにしている。

すわ・あつし 1967年、北海道生まれ。画家。広島市立大学芸術学部美術学科油絵専攻准教授。作品集に「どうせなんにもみえない」（求龍堂）など。